

一般財団法人沖縄県北部医療財団 理事長 大屋祐輔 先生



広報委員 出口宝 先生

一般財団法人沖縄県北部医療財団 理事長 大屋祐輔 先生

出口先生> この度は、一般財団法人沖縄県北部医療財団理事長ご就任、誠におめでとうございます。

先生は2025年4月より北部に赴任され、公立沖縄北部医療センターの開設準備という大きな課題に取り組んでおられます。まずは、ご就任にあたっての思いと、北部の印象についてお聞かせください。

大屋先生> ありがとうございます。このたび財団理事長という大役を仰せつかり、大変光栄に存じております。

北部地域は、私にとっても非常に親しみのある地域です。琉球大学在任中も北部の先生方と頻りに交流があり、地域の課題についても日頃から伺っておりました。そのため、今回こちらに赴任することについて特段の抵抗はなく、自然な流れでこの地に来ることができたと感じております。

今回の就任は、私自身が立候補したというわけではなく、各方面からのご推薦によるものと伺っております。詳細は存じませんが、北部の新基幹病院は琉球大学の支援を受けながら進めていく計画であること、また県立病院とも連携を図る必要があることから、大学および県立病院双方と関係を築いてきた点、さらに北部の医師の先生方とも日頃から親しくさせていただいていたことが評価されたのではないかと考えております。関係するすべての団体と円滑な関係を築いてきたことが、大きかったのではないのでしょうか。

北部に来てからの印象ですが、何よりも「まとまりの良い地域」であるということです。皆さまが非常に協力的で、「一緒に頑張っていこう」という雰囲気が強く、とても仕事がしやすい環境だと感じています。その温かさと前向きな姿勢は、大変心強く思っております。

出口先生> ありがとうございます。

さて、先生が中心となって準備を進めておられる公立沖縄北部医療センターは、2028年開院予定と伺っております。計画も順調に進んでいるとのことですが、まずは沖縄県北部医療財団の概要、そして新病院の概要についてお聞かせください。

大屋先生> 公立沖縄北部医療センターは、沖縄県、北部地区医師会、そして北部12市町村との合意に基づいて計画されたものです。

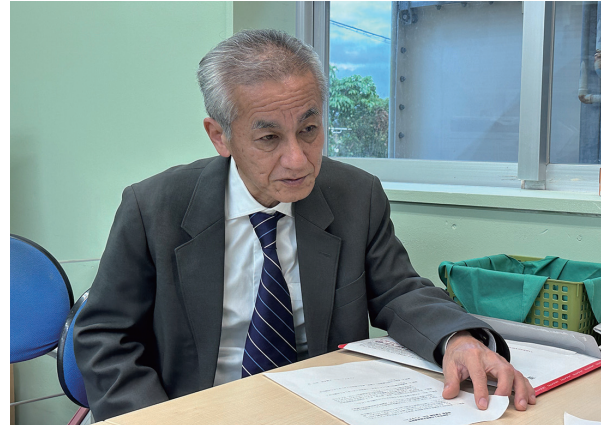
その目的は、北部地域の医療体制の強化にあります。特に、急性期医療や一定レベルの高度医療について、可能な限り地域内で完結できる体制を整えることが大きな柱となっています。すべてを担うことは難しいかもしれませんが、地域住民の皆さまが安心して医療を受けられる体制を築くことが期待されています。

現在、県立北部病院と北部地区医師会病院の二つの病院がありますが、これらを統合することで、医療機能の効率化が図られると考えています。人材確保の面でも、両病院の強みを活かし、足りない部分を補い合うことで、より理想的な体制を構築できるのではないかと考えています。

沖縄県北部医療財団は、この公立沖縄北部医療センターの開院後に運営を担う法人として設立されました。法人形態は一般財団法人です。制度改正により、一般財団法人でも公立病院の運営を担うことが可能となったため、この形態が採用されました。

病院の整備主体は「沖縄県北部医療組合」であり、施設の整備・所有は同組合が担います。つまり、病院は沖縄県が関与する公立病院であり、私たち財団は指定管理者としてその運営を担う立場になります。言い換えれば、沖縄県の地域医療・政策医療を支える病院を、私たちが責任を持って運営するという形です。

病院規模については、両病院を統合し、病床数は約450床でスタートする予定です。機能としては急性期医療を中心とし、一定の高度医



療にも対応する体制を目指します。

ただし、近年の地域医療の流れを踏まえると、急性期機能に一定程度特化しつつ、一般医療や高齢者医療については地域との連携、回復期病院との連携、介護施設との連携、地域診療所および在宅診療との連携をより強化していく方向性も重要になります。現時点で全ての役割が完全に固定されているわけではなく、地域との協議を重ねながら、最適な機能分担を模索していくことになると考えています。

出口先生> 先生はこれまで、琉球大学病院長、琉球大学理事・副学長、さらに厚生労働省や全国的な医療関連の会議などにもご参画されてこられ、日本の医療全体を俯瞰してこられました。そのご経験を踏まえ、今回、北部地域で公立沖縄北部医療センターの運営に携わられるわけですが、北部の医療をどのような方向へ導いていきたいとお考えでしょうか。

大屋先生> ありがとうございます。先ほどお話しした運営方針とも重なる部分はありますが、まず日本全体の医療が今どこへ向かっているのかという点からお話ししたいと思います。

私は大学病院長としてこれまで約6年間、全国規模の医学部長・病院長の会議、日本医師会との意見交換会、厚生労働省の「第8次医療計画等の検討会」「新たな地域医療構想等の検討会」に参加し、日本の医療政策の議論を間近で

見てきました。そこで強く感じたのは、これからの医療は「人口減少」「急速な高齢化」「医療従事者不足」という三つの大きな課題を前提に組み立てていかなければならないということです。

さらに地域差の問題、診療科偏在の問題、そして急性期病院における医師の過重労働など、構造的な課題も顕在化しています。こうした中で国が進めているのが「新たな地域医療構想」であり、高齢者医療をどう支えるか、地域連携をどう強化するか、そして医療従事者が持続可能な形で働ける環境をどう整えるかが重要なテーマになっています。また、並行して「医師確保計画」の策定も全国だけでなく、各都道府県でも行うようになります。

幸い、沖縄県は全国に比べて人口減少の波が10～20年ほど遅れて訪れるとされています。しかしその一方で、高齢化は今後急速に進みます。そして20年、30年後には高齢者人口そのものも減少していく時代を迎えます。つまり沖縄は、「これから急増する高齢者への対応」と「将来の人口減少時代への備え」という二つの課題を、同時に見据えながら準備を進めなければならない地域なのです。

では北部はどうかというと、実は沖縄県全体よりもやや早く人口減少の影響が表れ始めています。その意味で、北部は県全体より一歩先に取り組みを進めなければならない地域だと考えています。公立沖縄北部医療センターの開設とその後の運営は、まさにその転換点にあたります。将来を見据えた医療体制を構築しなければ、環境の変化という“荒波”に飲み込まれる恐れもあります。だからこそ、地域の先生方としっかり議論を重ねながら進めていきたいと考えています。

もう一つ、沖縄医療の地域特性についても触れたいと思います。沖縄では一次救急を担う診療所が少なく、軽症から重症まで多くの患者さんが病院救急に集中する構造になっています。現在は病院数と医師数で何とか支えています。今後の人口動態や人材状況を考えると、同



じやり方を続けるのは難しくなる可能性があります。

医療資源が大きく増える見込みがない中で、救急中心型の医療体制をどのように持続可能な形へ転換していくのか。これは沖縄県全体で取り組むべき課題です。すぐに答えが出るものではありませんが、いずれ必ず向き合うべきテーマです。

来年度から「新たな地域医療構想」に基づいた医療政策が本格的にスタートしていきます。北部地域が真っ先に取り組むことで、これからの課題を乗り越えること、そして、基幹病院がその中核として地域を守り、人材を育成していくようにしていきたいと思います。北部は地域のまとまりが非常に良いという強みがあります。だからこそ、北部での取り組みが沖縄県全体のモデルケースとなる可能性もあります。公立沖縄北部医療センターを核として、持続可能で、地域に根ざし、将来を見据えた医療体制を築いていきたいと考えています。

出口先生> 全国的には急性期病院の集約化が進められていますが、北部では今回、先行して統合という形が実現しました。一方で、北部地域は沖縄本島の約半分を占める広大な面積を有し、12市町村が点在しています。この広域医療を今後どのように支えていくお考えでしょうか。

大屋先生> ありがとうございます。ご指摘のとおり、北部は非常に広域であり、その中に12市町村が存在しています。多くの自治体がそれぞれ診療所を運営し、これまで地域医療を支えてきました。そのご努力には本当に敬意を表したいと思います。

今後、公立沖縄北部医療センターの開設に伴い、一部の診療所についてはセンターの附属的な位置づけとして連携を強めていく方向で検討しています。ただし、すべてを一律にということではありません。地域住民の皆さま、そして各自治体のご理解とご納得を得ながら、丁寧に進めていくことが何より重要だと考えています。

課題はやはり、広域性と人口動態の変化です。人口減少が進めば、診療所の維持運営はさらに難しくなります。また、医療従事者を今後どこまで安定的に確保できるのかという問題もあります。現在は何とか支えられていても、将来的には予測できない事態が起こる可能性も否定できません。

だからこそ、複線的な備えが必要だと考えています。その一つが、モバイルクリニック（医療 MaaS）の活用です。医療機能を地域へ「届ける」発想で、巡回診療を機動的に行う体制を整えていくことも選択肢の一つです。

また、看護師等が地域を巡回し、遠隔で医師と連携する仕組みづくりも重要になります。いわゆるリモート診療の活用です。各診療所が地域のハブとなり、そして公立沖縄北部医療センターが全体の中核（センターハブ）となる。そのネットワーク型の医療体制を構築することで、広域であっても質を落とさず医療を提供できる可能性があります。

北部地域に最適な形は、都市部と同じモデルではありません。広さ、人口構造、交通事情といった地域特性を踏まえた「北部型モデル」をつくる必要があります。そのためにも、地元の課題やニーズをしっかりと調べていくことから始めたいと思います。そしてそれが将来的には、他の地域にとっても一つの参考事例になることを目指したいと考えています。

広域であることは課題であると同時に、新しい医療の形を試みるチャンスでもあります。その視点を持ちながら、持続可能な地域医療体制を構築していきたいと思っています。

出口先生> それでは恒例の質問になります。沖縄県医師会に対するご意見やご要望がありましたらお聞かせください。先生は理事を長年お務めになりましたので内部から見た医師会



はよくご存じだと思います。一方、現在は外からご覧になっている立場でもあります。両眼でご覧になられていかがでしょうか。

大屋先生> 沖縄県医師会には、理事として関わらせていただきましたが、非常に活発で、理事の先生方も職員の皆さんも高いモチベーションを持って活動されていると感じています。その点は本当に素晴らしいことだと思います。

一方で、内部にいた頃から感じていたのは、「皆さん元気すぎる」ということです。活動がどんどん広がることで、かえって疲弊してしまうのではないかと懸念もありました。ですから今後は、活動に“強弱”をつけることも大切ではないかと思っています。

ここでいう強弱とは、緊急度や重要度を見極めることです。医師会が必ずしも自ら担わなくてもよいものは他に委ねるなど、優先順位を整理することで、より重要な課題に力を集中できるのではないのでしょうか。これは要望というより、アドバイスに近いかもしれません。

要望という点で申し上げますと、まず各地区医師会との連携強化です。県医師会が目指す方向性については意見交換が行われていますが、例えば国から新たな取り組みが示され、それを地区医師会へ伝えた際に、十分に実行できない場合のフォローアップ体制があれば、より効果的ではないかと思っています。

一例として、「かかりつけ医機能」の認定取得については、国からも強く求められている取り組みですが、地区レベルでの働きかけが十分かという点、まだ伸びしろがあるのではないのでしょうか。すでに何度も声かけはされていると思いますが、それをどう継続的に進めるのか、うまくいかない場合に次のステップをどう設けるのか——その仕組みづくりが今後の課題だと感じています。

もう一点は、「おきなわ津梁ネットワーク」についてです。非常に良い仕組みが構築され、活用も進んでいますが、まだ、一気に広がるよ

うな“ブレイクスルー”には至っていない印象があります。これが一段階抜けると、多くの県民が参加して、多くの医療者、病院、クリニック、薬局などが利用できる社会インフラになる可能性を持っている取り組みだと思います。

そのためには、まず参加患者数を増やすこと、そして診療所や病院が中核病院と連携しながら、「ネットワークがあって良かった」と実感できる成功事例を積み重ねていくことが重要です。実例が増えれば、自然と広がりも加速するはずですよ。

私自身もどのように活性化するかワーキンググループに多少関わっていますが、正直に申し上げれば、自分の患者さんの津梁ネットワークへの参加が十分に多いかというと、まだ不十分です。だからこそ、県全体、医師会全体でこの取り組みをさらに推進し、県民に広報し、医療関係者に情報を提供し、参加者を増やしていくことが望ましいと考えています。沖縄の医療の将来を支える基盤として、ぜひもう一段の発展を期待したいところです。



出口先生> それでは最後に恒例の質問です。日頃の健康法やご趣味、座右の銘などがありましたらお聞かせください。

大屋先生> 日頃の健康法としては、やはりジョギングですね。以前から続けていますが、マラソン大会などを一つの目標にして、それに向けて練習を重ねるようにしています。毎日必ずというわけではありませんが、折を見て走ることを続けています。目標を持って取り組むことで、結果的に健康維持にもつながっているのではないかと思います。歳を取って感じるのですが、無理をすると怪我などの不具合がおこるようになりました。自分の無理なくできる範囲で最大限の努力をするという、難しい課題に取り組んでいるとも言えます。

食事については、できるだけ偏らないように心がけています。特定のものに偏るのではなく、さまざまな栄養素をバランスよく摂るように意識しています。特別なことをしているわけではありませんが、「無理をしない範囲で整える」ということを大切にしています。

趣味も、今いちばん時間を使っているのはやはりジョギングでしょうか。あとは旅行が好きなので、出張の際などは時間を見つけて少し街を歩き回ったりしています。映画も好きなのですが、最近はなかなかまとまった時間が取れず、ドラマ等を楽しむぐらいになりました。以前はゴルフもしていましたが、20年ほどできていません。皆さんから誘われることが多く、もし機会があればまた再開したいとは思っています。

そして座右の銘ですが、「初心忘るべからず」です。医学部を卒業する際に祖父から「これをしっかりと守っていきなさい」と言われた言葉です。そのときに強烈に印象に残ったというよりも、後になってじわじわと心に残り続けている言葉です。立場や環境が変わっても、最初に志した思いを忘れないこと。それを日頃から意識するようにしています。

医療を取り巻く環境は大きく変化していますが、どの立場にあっても、原点を忘れずに歩んでいきたいと思っています。



P R O F I L E

【現職】

沖縄北部医療財団 理事長、琉球大学 名誉教授、
琉球大学病院 病院長特別補佐、日本専門医機構 理事

【学歴】

1982年 九州大学医学部 卒業（医師免許取得）
1988年 九州大学大学院 修了（医学博士）

【職歴】

1982年5月～1984年3月
九州大学病院 研修医
1987年より1989年7月
米国オハイオ州シンシナチ大学医学部
生理学教室へ留学
1989年8月 公立学校共済組合九州中央病院 内科医長
1992年5月 九州大学医学部 助手（第二内科）
1997年4月 同上 講師
2002年4月 琉球大学医学部
第三内科 助教授（准教授）
2010年8月～2023年3月
同上 循環器・腎臓・神経内科学講座 教授
2019年4月～2025年3月
琉球大学病院 病院長、
琉球大学 理事・副学長
2025年5月 沖縄県北部医療財団 理事長
2025年5月 琉球大学 名誉教授
現在に至る

【所属学会役職】

日本高血圧学会（名誉会員、FJSH、専門医）、
日本心臓リハビリテーション学会（名誉会員）、
日本内科学会（功労会員、認定医）、
日本循環器学会（功労会員、専門医、FJCS）、
日本老年病学会（代議員、専門医）、日本心臓病学会（FJCC）

出口先生> いいお話を聞かせていただきありがとうございます。

本日はお忙しい中、ありがとうございます。

インタビューアー：広報委員 出口 宝